

1986年4月26日の深夜、チェルノブイリ4号炉は爆発した。もうじき38年を迎えるチェルノブイリは今どうなっているか。そして爆発から13年目を迎えた東電福島第一原発はこれからどうなるのか。原発事故から我々は何を学ぶべきか。過去に学ばなければ人類は再び原子力の災いを犯す。

チェルノブイリの今

38年前、燃えさかるチェルノブイリ4号炉から飛散する放射能を阻止するために、6,000トンに及ぶ粘土や鉛を空から投下し石棺が作られたが、時間が経つにつれ地盤の不等沈下で屋根が壊れ雨による汚染水が発生したため、2019年7月11日に高さ150mに及ぶ巨大なドームで石棺は覆われた。現在、約4千人の作業員が働いている。彼らは月15日、または週4日の作業で放射能の拡散防止などを続けているが廃炉までには今後100年かかるという。1号炉は現在廃炉作業中、2号炉は1999年3月に、3号炉は2000年12月に運転停止したが廃炉作業はまだ行われていない。1～3号炉は2065年までに廃炉の計画だが予定通りにいくかどうかは定かでない。チェルノブイリは2022年2月24日のロシアによる侵攻で一時占拠されたがロシア軍は3月31日に撤退した。チェルノブイリ事故では144,000haの農地と492,000haの森林が放射能で汚染され放棄されたままである。30km圏内は現在もそのままの状態、かつて私たちが訪れた学校や幼稚園の荒れ果てた状況は変わっていないようである。30km圏内の立ち入り禁止ゾーンには今も130～150人のサマシヨロが生活しているという。最近の研究によれば、事故当時、乳児や胎児だった人々の脳には損傷が見られ、被曝線量と脳と眼の機能障害には明らかな相関関係が見られるという（ウクライナ国立放射線医学研究所）。チェルノブイリ原発事故の影響はまだまだ続いている。

福島第一原発の今

事故から13年経った今も福島第一原発（以下、福島1）の廃炉作業は殆ど進んでいない。メルトダウンして炉底に落ちたデブリは1号～3号合わせて880トン。これまで3回にわたってロボットで取り出そうとしたが何れも失敗に終わり、1gも取り出せていな

い。原因は何れも高レベルの放射能で、コンピューターなどの電子回路が機能しないため、旧来の機械的操作で取り出すしかない為である。同様の事はチェルノブイリ事故の際にも起こっていた。昨年来、問題になっている放射能汚染水対策も見通しが立たない。3月17日、今年度4回目の汚染水の海洋放出が終わり、これまでに31,200トンの汚染水が海に放出された。しかし、今も新たな汚染水が毎日90トン発生している。地下水や雨水が溶け落ちた炉底に入るからである。本来なら原子炉の周囲をコンクリート壁で覆えば汚染水の増加はなかったはずだが、一時的にしか機能しない凍土遮水壁を採用したためである。汚染水には更に大きな問題がある。発生した汚染水には泥水や細菌などが含まれており、ALPS処理の為に前処理で汚泥を除去する必要がある。溶けた金属イオンなどを沈殿させるために鉄イオンを含む酸性の液体を投入し、それを中和沈殿するためにアルカリ性の苛性ソーダ水を投入する。その結果、膨大な量の高レベル放射性沈殿物（ヘドロ：3×10（8乗）Bq/mlが発生し、その量はこれまでに6,574 m³に及ぶが、その処理方法はない。ALPSで処理した汚染水の海洋放出も30年では終わらない。政府や東電の「廃炉」は欺瞞に過ぎない。そして放射能汚染地域の除染で出た汚染土壌である。大熊町と双葉町の間貯蔵施設の汚染土壌は総量1400万m³。これを2041年までに町外に運ぶ約束だが、それを受け入れる地域は無い。国や東電のこうした政策は、すべてその場しのぎの逃げ口上である。原子力はそもそもこうした偽善に満ちた産業技術だった。核も原子力も未来を奪う。原子力村の科学者、産業界、政治家達の責任は重い。

（2024年3月17日 河田）